

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
国際協力研究科	国際開発政策専攻

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt;
 (4) ジェンダーに敏感な災害対策はどのようなものだと思いますか

(1) フィールドトリップにてケマダン地区とメラピ火山の周辺地域を訪問した。ケマダン地区はジョグジャカルタからバスで一時間半ほどの沿岸部の地域であり、ビーチが整備されていて観光地にもなっている。沿岸部であるため津波のリスク、また洪水のリスクの高い地域であった。ケマダン地区では地域の災害管理本部とビーチの様子を観察するモニター室を見学した。災害本部の担当者から地区全体で避難訓練がどのようにおこなわれているか、津波が起こった際の周知の方法、洪水など他の災害に対する事前の準備について説明を受けた。メラピ火山周辺の地域はガジヤマダ大学からバスで 1 時間ほどに位置していた。メラピ火山は活動が活発な火山であり、5 年に 1 回のペースで噴火をしている。2010 年の噴火は大規模なもので、多くの死者を出し、住人の中にはほかの地区への移住を余儀なくされた。そこでは火山に特化した災害管理センター、避難所、早期警報システムなどを見学した。メラピ火山周辺地区の災害管理本部では、火山活動のモニター方法、管理本部が提供するアプリなどの情報ツール、火山が起こった際の避難計画の説明を受けた。また災害に備えた食料や子供たちのための勉強道具や遊び道具が貯蔵されていること、住民を輸送するためのトラックなども見ることができた。また被災した方々が移り住んだコミュニティにも訪問し、コミュニティの様子を見るとともに、実際に被災した方の当時の経験を聞くことができた。

(2)
 (3) 両地域とも、早期の警報システムなどの災害が起きた時のための準備は入念に行われているという印象を受けた。ただ住人の方の話を聞くと噴火の際にはサイレンの音が聞こえなかったなど、肝心な時に適切に機能していない様子だった。災害の際の準備や対応に関しては多くの災害を経験している日本でも多くの課題があり、それはインドネシアでも同様であることを今回学び、改めてその難しさを実感した。ただインドネシアでは年に一回警報が正常に作動するかをテストするらしいが、半年に一回にするなどして精度を上げることができるのではと感じた点もあり、改善の点はまだ多く残されているという印象ももった。

ケマダン地区の災害管理本部ではコミュニティの人だけでなく、観光客を巻き込んだ避難訓練を実施しているという話を伺った。また学校での避難訓練では児童や生徒だけでなく、学校の周辺に住む住人も参加しているという。この点はユニークだという印象を私は持った。私が知る限りではあまりそのような避難訓練を聞いたことがなく、特に学校での避難訓練でコミュニティの住人を巻き込むことは人手を増やすことで多くの子どもに対応できることや災害への意識の高まりなどにもつながり、効果的だろうと感じられた。一方でメラピ火山周辺の地域では、住人から新しい地区に移り住んでから一度も避難訓練などが行われていないといった不満の声が聴かれた。ただコミュニティのリーダーの話によると 1 年に一度避難訓練は行われているようで、そのことから周知の方法などに問題があるのではないかと感じた。

メラピ火山の周辺地域では避難計画の一環としてそれぞれの村に姉妹村や姉妹校が決められていて、もし噴火が起こったときに避難先となるそうである。また溶岩は川の流れることによってより早く流れてくるため非難の際は川を渡ることをないようにしていて、そのことを考慮して姉妹村などが選定されているそうだった。ただ姉妹村となっているお互いの村が同時に被災したらどうなのだろうという疑問が残っている。例えば統計的に二つの村は独立して災害が起こるなどのエヴィデンスなどについてもう少し聞ければよかったと思っている。またメラピ火山の噴火によって家を失った住人は 2 年間仮

設住宅に住んだそうだが、その仮設住宅は竹で作られており雨が降るたびに雨漏りや浸水などが起こっていたという。日本では速やかにある程度の強度を持った仮設住宅が整備されるので、そのような相違点には少し驚いた。災害の際に義援金を送るだけではなく、仮設住宅についてなどの災害に対するノウハウなどの国際協力がより進めばいいと思った出来事であった。

- (4) プログラムの授業やフィールドトリップで学んだことをふまえて、最後の二日間でジェンダーや脆弱性を考慮に入れた災害対策を考えた。その中で私が最も重要だと感じた考えの一つがレジリエンスというものである。レジリエンスとは、もちろん起きないことに越したことはないが、災害が起こった場合に、ネガティブな側面だけを考えずに逆に良い機会ととらえ、災害前よりも良いコミュニティや社会の関係を気づいていこうという考えである。災害の復興の段階を、今まで家庭内労働に従事していた女性をより社会進出を促進できるようにする社会の構築や男女の役割の再考などにつなげていくことが重要であると学んだ。

ジェンダーに配慮した災害対応で難しいと感じたことが避難所をどのようにするかということであった。阪神淡路大震災や東日本大震災の時に運営側がほとんど男性で生理用品を受け取りづらい、避難所の料理などは女性が担当したなどのプライバシーやジェンダーなど、特に女性に対しての課題や問題が山積したという。授業などで以上のようなことを学び、災害時で混乱しているとはいえ、プライバシーなどの人権に配慮することは重要であるということを改めて感じた。災害物資の調達や運営などの意思決定プロセスに女性の数を増やすことでより女性目線の声を反映させるなど対策の方法はさまざまに考えられる。仮に私が将来、災害対応の業務をしなければならないことになったときに、今回学んだジェンダーに関することに対応した意見が言えるほどに今回はさまざまなことを考え、学んだと感じている。

